

日本マス・コミュニケーション学会 36 期第 15 回研究会（メディア史部会企画）

「関西民放の歴史を掘り起こす～証言集『民間放送がかがやいていたころ』から」

日時：

2019 年 2 月 20 日（水） 14 時～17 時

場所：

同志社大学大阪サテライトキャンパス（大阪市北区梅田 1-12-17 梅田スクエアビルディング 17 階）

問題提起者（報告者） 木下浩一（京都大学大学院教育学研究科、元朝日放送）
討論者 辻一郎（元毎日放送）ほか下記著作編者、関西民放関係者
司会者 松尾理也（大阪芸術大学短期大学部）

企画の意図：

草創期のテレビ人の高齢化が進む中、テレビ史の掘り起こし・記録は喫緊の課題として浮上している。その危機感の中で、テレビ人自身で関西におけるテレビ草創期の歴史を書き残そうとする試みが、関西における民間テレビ放送の立ち上げ、そして黄金期を担った 51 人のプロデューサー、ディレクター、カメラマン、技術者、編成マン、営業マンらに「ゼロからの歴史」について、民放人自らが聞き取り調査を行った証言集、関西民放クラブ「メディア・ウォッチング」編『民間放送のかがやいていたころ』（大阪公立大学共同出版会、2015 年）である。

日本の放送史にはいくつかの穴がある。ラジオ史偏重によるテレビ史の「穴」、公共放送たる NHK 偏重による民放史の「穴」、民放のなかでも後発局や地方局の「穴」、さらには東京キー局偏重による関西民放史の「穴」。同書は放送史の「穴」を埋める貴重な存在と評価されるべきであろう。編者でもある辻一郎・元毎日放送取締役編成局主幹は、2013 年の「テレビ放送開始 60 年」で、東京制作の番組ばかりに脚光が当たる感触を持ったという。実際には関西民放は数々の話題作、名番組を（時には視聴者にそれとは気づかれず）制作し、日本のテレビ文化そのものを作り上げていった重要なプレーヤーであった。同書は、東京一極集中が進むメディア環境の現状に対する「複眼思考のススメ」でもあろう。

ただ同書が上梓されて以後、アカデミズムの側からの応答は必ずしも十分であったとはいえない。実務側の努力をたんなる「昔話」や「懐旧談」に終わらせず「メディア史」にまで結実させるためには、アカデミズム、実務側双方からの議論にもとづく総括や残る課題の焦点化が不可欠である。

以上の問題意識を踏まえ、では、テレビ研究者として自らも民放史の聴きとり作業を続けている木下氏を問題提起者とし、辻氏ら編者側からも討論者を迎え、関西民放草創期の歴史を掘り起こす意味、さらには関西におけるジャーナリズムや公共空間の成立とテレビとの関係などを議論したい。

以上